

# 小学校外国語科・外国語活動におけるCLILの充実

## —教科横断的な単元構成の開発を通して—

担当者（代表者）大森有希子\*，遠藤勇太，檜木航平，白間勇輔，ホール・ジェームズ\*\*

\*岩手大学教育学部附属小学校，\*\*岩手大学教育学部英語科

（令和3年3月4日受理）

### 1. はじめに

本校では一昨年度から、CLILの単元開発について研究を進めてきた。CLILとは、Contents and Language Integrated Learningの略で、内容言語統合型学習のことである。この学習方法は、教科内容と英語運用能力の両方を統合させながら学ぶことができる。また、暗記や理解に偏ることのないバランスのとれた多様な学習活動を行うことができる。

我々は、CLILが4月から施行された学習指導要領で外国語科・外国語活動の授業づくりにおいて重要視されている「目的・場面・状況の設定」に、大きく資することができる学習方法だと考える。

本プロジェクトは、その多様な学びの展開が期待できるCLILを用いて、外国語科・外国語活動の単元を開発していくものである。

そこで、今次研究では、4つのCを基に、児童の学びに対する意欲の向上や会話スキルの向上を促す教科横断的な単元を開発することを目的とする。

### 2. 方法

#### （1）研究計画

6月 学部とのカンファレンス

7月～2月 令和2年度授業研究（実践と開発）

10月 学部とのカンファレンス

12月 外国語活動授業研究（3年生）

2月 外国語科授業研究（5年生）

#### （2）研究方法

CLILを用いた単元開発と実践を重点として、本プロジェクトを推進した。

外国語科・外国語活動の授業において、児童の学

習の様子を単元通して記録し、児童の学びの変容を見取っていく。

外国語科・外国語活動の授業の中に組み込む教科は、前学年までの既習事項を取り入れることとし、その有効性について検証していく。

### 3. 結果

#### （1）本校のCLILについて

CLIL（Content and Language Integrated Learning：内容言語統合型学習）とは、教科教育（数学、社会、理科等）と外国語教育の両方を統合させながら学ぶことができる学習方法である。CLILは児童を中心に据え、暗記に偏ることのないバランスのとれた多様な学習活動を行うことが可能である。

CLILでは大切にしたい4つのCがある。

本校では、小学校段階を考慮して以下のようにCLILを捉え直し、一昨年から研究を進めている。

#### ①content

外国語活動及び外国語活動の学びにおいて、他教科と関連させた内容であること。

#### ②communication

学習者同士のコミュニケーション活動が学びの文脈に位置づいていること位置づいていること。

#### ③cognition

学習者の思考に沿うように、自由度のある英語運用を行うこと。

#### ④culture

自由度のある英語運用を支える教師の集団作り、学習者のコミュニティーのこと。

①content について

他教科の既習内容を外国語科・外国語活動の単元計画の中に盛り込むことで、外国語の学習をより充実させることができるように考えた。

②communication について

外国語教育の中で、授業の目標が理解させたい外国語言語項目を対象にする傾向が見られる。そうではなく、ある教科の領域を理解しながら、児童間でのやりとりができるようにする。

③cognition について

外国語活動及び外国語における言語活動では、定型表現のやりとりに加え、その場に応じて自由度のある、オーセンティックなやりとりができる。CLIL の学習計画段階では、学習活動が要求する論理的な思考が特定されている、例として、「分類」、「定義」、「描写」、「説明」、「探求」、「情報」を挙げることができる。これらの論理的な思考を学習計画に設定することで児童は目的をもって自由度のあるやりとりを行うことができる。

④culture について

児童は、外国語科の学習において英語を用いてやりとりを行うコミュニティーに属している。さらに、それは現代のグローバル社会でも同じコミュニティーに属していると言える。児童自身が外国語を使ってやりとりを行うコミュニティーに属しているという自覚をもつことが大切だと考える。

CLIL の指導に当たって、上智大学文学部英文学科池田真准教授は以下のような選択肢を紹介している（池田, 2016, p. 34）。



本校はこの選択肢に基づいて、以下のように CLIL を実施している。

目的 : Soft CLIL

本校では、CLIL を用いて学習を展開する目的を、「英語教育」とする。科目教育を目的としまうと第二言語である英語で、他教科の授業を展開し、理解させ、評価することになる。これでは、指導者の英語力も必要であり、また児童も英語を理解していることが前提となる。そうではなく、他教科と統合しながら英語運用をメインに学習を進めることが小学校段階では効果的だと感じる。

頻度・回数 : Light CLIL

頻度は、学期に1～2単元を目標として行う。カリキュラムマネジメントの面で工夫が必要であり、他教科の理解もままならないまま英語と統合してしまうのは、児童にとって有効ではないと考えたからである。児童の混乱を防ぐため、原則として、既習事項と組み合わせることとする。

比率 : Partial CLIL

単元全てを他教科と統合して行うことができるのは、例えば総合学習など汎用性の高い教科では可能だと考える。しかし、多くの場合、表現に慣れ親しむ時間が必要だったり、やりとりの経験を積ませることが必要だったりと毎時間教科統合するのは難しい。単元の中の1～2時間を教科統合するのが望ましいと考える。

使用言語 : Bilingual CLIL

All English の授業が理想ではあるが、知識の少ない小学生には厳しいものがある。全員を同じ土台に乗せた上で言語活動ができるよう活動のルールの説明等は日本語で行い、全員が不安感を抱くことなく活動に入れるようにする。

本校の研究方針に基づいたこれら4つのCを意識して教科横断的な単元開発を行った。

(2) CLIL を活用した教科横断的な単元の開発

教科横断的な単元開発を行う際、次の①～③の点に留意することを通して、児童の学びに対する意欲の向上や会話スキルの向上を促す学びの構想ができることが明らかになった。

①単元のゴールの姿(目標)の設定

児童の意欲が高まるような目標を設定する。その難易度は高すぎないことが原則であるが、容易なものであると目的意識は薄れてしまう。英語でのやりとりを伴うこと、または、英語でのプレゼンテーションを行う言語活動がゴールの姿となるとよい。

②ゴールの姿を達成するために効果的な教科領域を決定 (content)

ゴールに行きつくために、必要な知識及び技能を考える。また、ゴールの姿の特性に合わせた他教科の学びの視点を取り入れて考えていく必要がある。例えば、「〇〇さんのためのランチメニューを考えよう」であると栄養バランスを考えたいと感じる児童が多い。そうすると家庭科的な視点も必要となるため、家庭科の学びを生かす必要がある。

③ゴールの姿を達成するための効果的なアクティビティ構想

また、アクティビティでは次の3点を取り入れて構想する。

- ア 英語でのやりとりが学びの文脈に基づくように、選択した教科領域を取り入れて対話的なアクティビティを設定する。(communication)
- イ 外国語を用いて楽しくやりとりを行う学習集団に属しているという所属感をもてるようにする。(culture)
- ウ 自由度のある英語運用を行うために、思考を伴ったアクティビティとする。その際、教師のモデリングや仲間とのシェアリングを活用する。(cognition)

(3) 実践

【単元名】 第3学年

Junior Sunshine 3  
オリジナルのはたをつくらう  
What color do you like?

【①単元のゴールの姿(目標)を設定】

この単元では、オリジナルの旗を作ることをゴールの姿と設定したが、自分で作るのではない。友達とやりとりしながらイメージしている旗をデザインしてもらう。そうすることで、好きな色や形を尋ねたり答えたりする必然性は生まれた。

【②ゴールの姿を達成するために効果的な教科領域を決定 (content)】

自分のイメージしている旗をデザインする際は、色や形の配色、配置を考えることは図画工作科の視点を取り入れることをねらいとした。

【③ゴールの姿を達成するための効果的なアクティビティを構想】

導入では、社会科的な視点を与えるため、世界の様々な国旗を提示し、世界各国に興味をもつきっかけとなった。日本の国旗は一つの形と二色のみ使われている。だが、世界各国の国旗は多色使用されていたり、星やオリジナルのマークが印字されていたりする。その意味や由来にも興味をもつ児童も現れた。

外国語でやりとりをしながら色と形の言い方に慣れ親しむアクティビティを第2時に取り入れた。

【単元計画】

時	目標◆・主な活動○
1	◆日本語と英語の音声の違いに気づくとともに、色や形など、身の回りの物を表す言い方を知る。 ○HRT が好きな国旗について話しているのを聞き概要の内容を把握する。 (中国, 南アフリカ共和国, トルコ共和国, ニュージーランド等) ○ポイントゲーム, ランキングゲームを通して色や形の言い方に慣れ親しむ。
2	◆色や形など、身の回りの物の言い方に慣れ親しむ。 ○Picture Grids で、色の言い方に慣れ親しむ。 ○Mr. Shape Head ゲーム形の言い方に慣れ親しむ。

3	<p>◆オリジナルの国旗を作るために、相手に伝わるように工夫しながら、色や形など、身の回りのものについて、伝え合う。</p> <p>○慣れ親しんだ表現を使い、オリジナルの旗づくりをする。</p>
---	---

【単元名】 第5学年

Junior Sunshine5 Lesson9  
「自分の町しようかい」をしよう  
I love my town.

【①単元のゴールの姿（目標）を設定】

ALTに岩手県内のおすすめ市町村をiPadを用いてプレゼンテーションすることを目標として設定した。本単元では、ゴールの言語活動で表現を適切に使えているかを見るのではなく、プレゼンテーションの練習を重ねていく上で表現が定着していく変容を見取った。

【②ゴールの姿を達成するために効果的な教科領域を決定（content）】

導入では、教師の故郷の町の特徴を教師自らモデリングで示した。この段階では、主にプレゼンテーションの中身について興味をもつ児童がほとんどである。次に、岩手県全体に視野を広げ、各市町村の特産物について考え、英語で発音していく。第4学年の社会科で学習した各市町村の特徴を想起し、どの市町村について最後プレゼンテーションしていきたいかを考え、選択していく。次にプレゼンテーションに必要なことを考え、それらの表現を使うやりとりを繰り返す。高さや数を表す大きな数の表現や状態や様子を表す形容詞などである。大きな数は第3学年の算数科での学習を想起させながら行う。

【③ゴールの姿を達成するための効果的なアクティビティ構想】

5年生のこの単元では、“This is ～.”と紹介する市の特徴を紹介するための“It’s famous for ～.”の2つの表現をやりとりの中で使えるようにするとともに、既習の“It’s ～.”を利用した形容詞なども取り入れていけるようにした。その後は、プレゼンテーションに適切な写真や表現を選択して練習を重ねる。第5時では、まず教師の不十分なモデリングから、プレゼン

テーションに必要なコミュニケーションスキルについて考える。また、他グループの町紹介を聞き、内容面のレベルアップを図る。

【単元計画】

時	目標◆・活動○
1	<p>◆単元のゴールを知り、活動の見通しをもつ。</p> <p>○モデルを提示し、単元のゴールを知る。</p>
	<p>自分が伝えたい岩手県の名所や名産品についてALTの先生に紹介しよう。</p> <p>・有名なものを紹介する表現を知る。</p> <p>It’s famous for～.</p> <p>○紹介したい名所や名産品について考える。</p>
2	<p>◆数の表現がわかり、ものの高さや長さなどを表現することができる。</p>
	<p>○数の表現に慣れ親しむ。</p> <p>・大きな数(thousand, hundred)の表現を知る。</p> <p>○岩手県にある山や川などの高さや長さを表現する。</p>
3	<p>◆対になる形容詞の表現がわかり、もの状態や様子を表現することができる。</p>
	<p>○対になる形容詞の表現に慣れ親しむ。</p> <p>・対になる形容詞(long-shortなど)を表すジェスチャーを考え、もの状態や様子を表現する。</p>
4	<p>◆友達と協力しながら「自分の町しようかい」の発表内容を考えることができる。</p>
	<p>○紹介したい名所や名産品について調べ、発表内容を考える。</p> <p>・班ごとに紹介したい名所や名産品について調べる。</p> <p>・既習の表現を用いた発表内容を考え、練習する。</p>
5	<p>◆「自分の町紹介」を交流し、発表内容を工夫することができる。</p>
	<p>○グループを作り「自分の町紹介」を交流する。</p> <p>・他の班の発表の様子を見て、学んだことについて班ごとに話し合う。</p> <p>・ALTの先生に向けた町紹介の練習を班ごとに行う。</p>
6	<p>◆「自分の町紹介」ができる。</p>
	<p>○ALTの先生に「自分の町紹介」をする。</p> <p>・班ごとに発表する。</p> <p>・互いの「自分の町紹介」を評価し合う。</p>





第5学年の実践では、より教科横断的な思考が児童に働いていたと感じる。

第1時の時間は、岩手県の市町村について考えたり答えたりする時間が多く、特産品の名前を口にするのみで英語運用はほとんど行われなかった。しかし、前学年で行った社会科の学びを想起しその学びを生かして、市町村の魅力を英語でプレゼンテーションするという目的を全員が明確にもつことができた。(content) また、プレゼンテーションで英語運用を行うために必要な表現も全員で共有することができ、全員の目的意識を同じ土台に乗せることができたと考える。(culture)

プレゼンテーションの仕方や内容の向上を図るために教師のモデリングを見て改善点に気付かせたり、他市町村同士でプレゼンテーションを聞き合ったりした。スモールステップでやりとりの機会を繰り返していくと、自然とオーセンティックやりとりも生まれてくることがわかった。

(communication) 高学年になると英語で質問したり、適切なタイミングで反応することができている。基礎知識を使う技能を、CLILを用いた単元構想の中で磨かれていくことがわかった。

## 5. まとめ

本研究を通して、次のことが明らかになった。

- ・あくまで英語教育を目的として、教科横断的な単元を構成することで、児童の学習意欲の向上につながる。
- ・統合する教科が既習事項であっても未習事項であっても、第一時にモデリングすることで児童は、学びの文脈の中で他教科の視点をもちながら、言語活動の目的をもつことができる。
- ・導入で教科横断的な要素を取り入れた目的をもたせることで、英語運用のための基礎知識や技能を得るための時間もより充実した時間になる。



## 謝辞

本研究を行うにあたり、多くの方々のご支援をいただきました。本研究のためにご意見をくださったみなさまに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

また、夢中になって学習に取り組んでいた子供達にも、心から感謝いたします。

## 引用文献

- ・池田 真. (2016) 『CLIL (内容言語統合型学習) : 上智大学外国語教育の新たなる挑戦 第3巻 授業と教材』上智大学出版.
- ・柏木 賀津子. 伊藤 由紀子. (2020) 『小・中学校で取り組む はじめてのCLIL 授業づくり』大修館書店
- ・『岩手大学学部 GP 教育実践研究論文集』一第7巻, 52-56
- ・大森 有希子 他(2020). 「第11節外国語科・外国語活動」『岩手大学教育学部附属小学校研究紀要第34集』, 76-82

